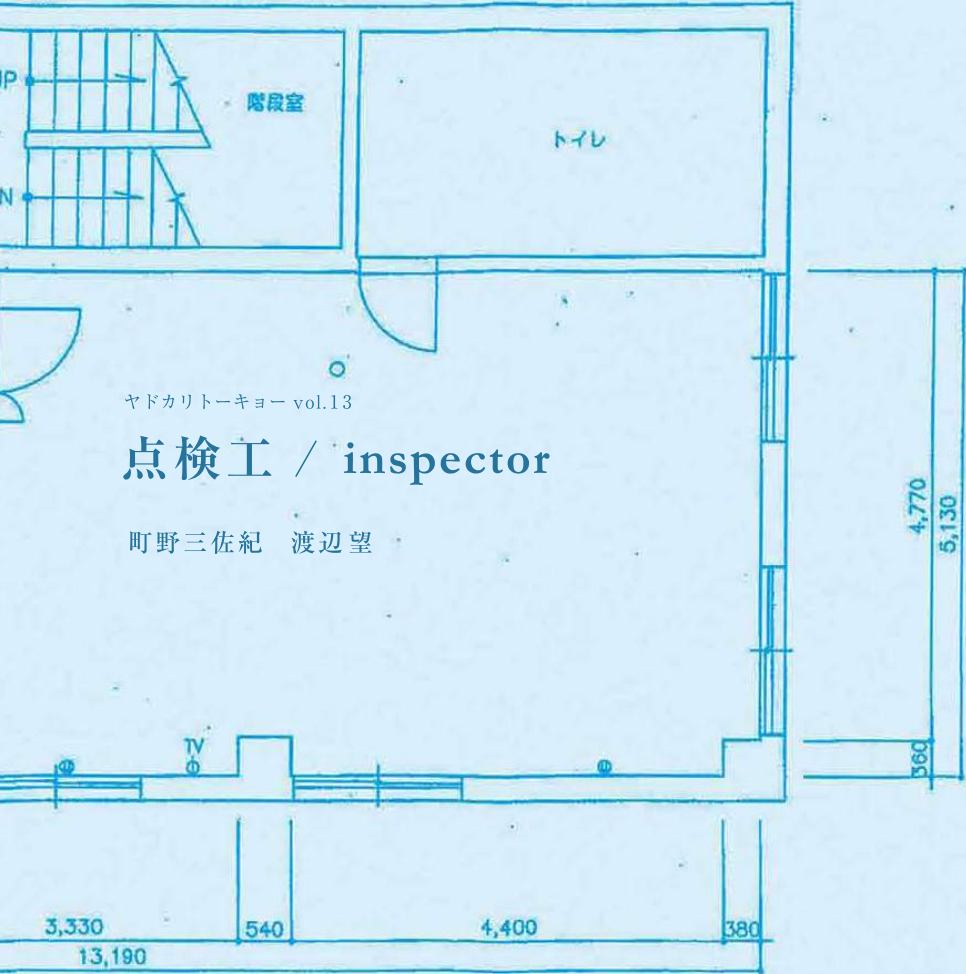


- ⊙ — 既存壁付コンセント
- — フロアダクト取出口
- TV ⊕ — 既存壁付 TV



新規 2階平面図 S=1/50

PROJECT NAME/LOCATION

DRAWING TITLE

SHEET #

2階平面図

SUBMITTED:

APPROVED:

PROJECT:

DRAWN:

CHECKED:

DATE: 02/05/2002 SCALE: 1/50

00 OF 00 SHEET

「点検工の姿勢でいること、点検工の視点を持つこと。」

創作の始まりや行程には、どのようなきっかけやルールがあるのだろうか。また、作品と場所との関係とはいかなるものだろうか。

インスタレーションの手法を用いて作品を発表する私たちにとって、展覧会場となる空間やその場所性を読み取ることは、作品を制作する上で重要な要素の一つとなる。作品の見え方や意図、鑑賞者の視点を誘導していく工夫も、作品が置かれる状況によって大きく変わる。また、場所の特性から作品のインスピレーションを得ることも少なくない。空間に含まれる小さな手がかりを拾い上げ、作家特有の視点をもってよく観察し、独自の方法を探りながら作品として組み立てていく。まるで作業工員が注意深く部屋の中を点検し、何もかもを発見するように、私たちは作品のきっかけとなる〈気づき〉を空間の中から探し求める。

そこで企画された展覧会が本展、「点検工 / inspector」である。

空き物件を利用した展覧会を企画する「ヤドカリトキョー」の特性を生かし、私たちは素の空間から作品づくりを始めることにした。会期が始まる10日ほど前から現場に通い、そこで行なわれる試行錯誤の過程そのものを、記録と合わせてリアルタイムで公開した。現場は、作品のインスピレーションを得る場所でありながらも制作場所であり、制作場所でありながらも展示場所でもあった。そして、そのような空間の中で、互いの思考、行為が時間の経過とともに折り重なり、作品に多様な変化をもたらす結果となった。

この記録集では、その連鎖的・流動的な空間と一連の行為の軌跡を振り返りながら、作家が作品を制作することについて改めて探るものになれば良いと考えている。

最後に、展覧会にご来場いただきました皆様、開催にあたりご支援いただきました関係者の方々、本書の発行にあたりご寄稿くださいました皆様に深く御礼申し上げます。

町野三佐紀

渡辺望



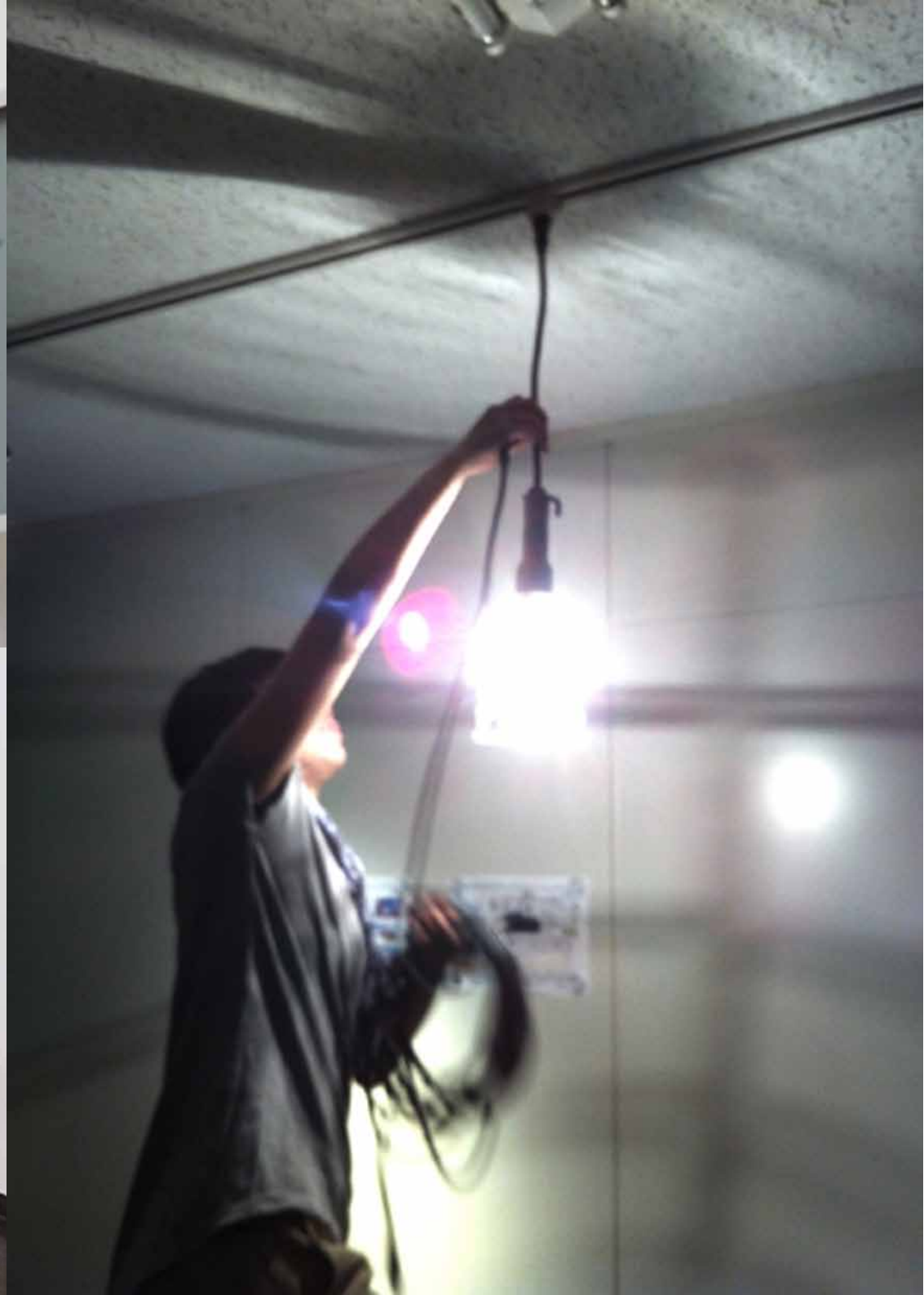
2014-09-09 — 2014-09-14

It is 15:34. I am entering the building and the art show in the same time. I am not sure what scares me more. I feel uncomfortable when locked in office cubicles. I feel anxious when exploring yet another work of art.

This one is different though - it has been inspected and certified. Proofs are everywhere: from instax images scattered around walls, stamped floor maps, sounds of office structures meticulously documented and two inspectors, being present and making sure we are all safe in this unprecedented environment. This exhibition will not confuse you. It will surprise you with overall disorder and clutter, it will astound you with noises of each floor you would normally encounter, it will engage you in variety of medium being used for keeping the art-work environment secure and comprehensible.

It is the office I could work at, plain and straightforward. The space which is direct in its simplicity, without politics, personal dramas, backbiting and unnecessary games. I wish I could remain longer but it's time to call it a day. 16:37. There is another opening to attend. I hope it has been inspected properly.

ジェイ・コムダ (アーティスト)



2014-09-16 — 2014-09-18

「点検工」によせて

ヤドカリプロジェクト「点検工」展を観た。ヤドカリは、本学出身作家がその中心になっていることもあり、その初期から観て来ている。しかし、本展はそのいくつかとも趣を異にしている、非常に楽しめた。いかにも内装業者然とした衣装に身を包んだ人が、床に寝転がったまま、会場に足を踏み込んだ私に一瞥もくれず一心に作業をしている。何かを描き続けているようだったが、一瞬実際に内装工事の違う部屋に間違っ入ってしまったのかと、まず周囲を見渡してしまった。その部屋は床や壁にコードが縦横に走り、天井の点検口が開け放たれ、壁には工程表らしき紙片がたくさん貼られている。

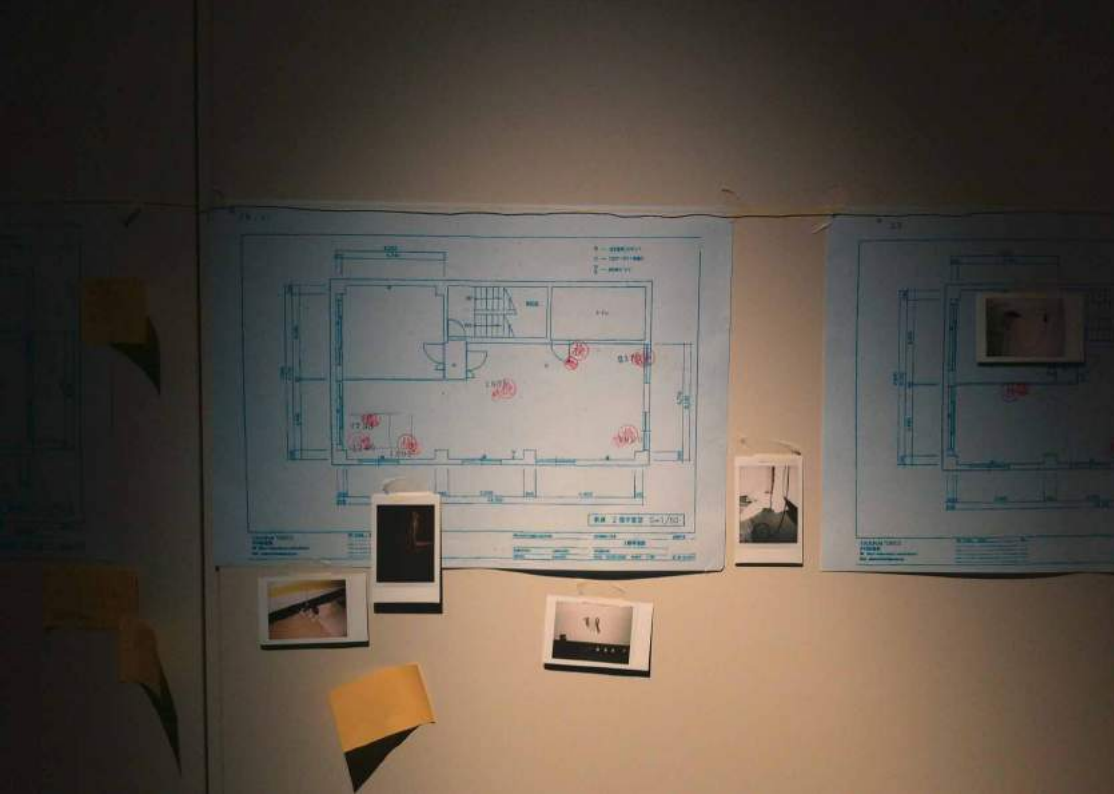
部屋をぐるりと回り、ヘルメットを目深に被ったその職人が、当のアーティストの町野さんと気付くまでにしばらくかかった。会期中ずっと不測の工程よろしく、作業を続けるのが作品とのことで、屋上には別に映像作品が投影され、現実の外梯子に、映像の人物が登っていた。

ヴィジュアルアートのフォーマットから逸脱し、閉鎖空間でのハプニングとして、ハイレッドセンターの「首都圏清掃整理促進運動」を想起させた。

次の予定もあり足早に会場を後にしたら、そこかしこで行われている工事現場が、すべて「点検工」になっていた。

2014年10月13日

近藤昌美（東京造形大学絵画専攻教授）



2014-09-19 — 2014-09-21

ヤドカリトーキョー vol.13「点検工/inspector」の
はゴリゴリした現代美術と言えるもの。
二人で10日くらいかけて手を入れ続けているというとっちらかった空間に腰を下ろしたら、案外威圧感もむさ苦しさもなく居心地の良さと悪さの塩梅が絶妙で気づけばけっこう長居してしまった。
もしかしてヘルメットを被った見目麗しい二人が小汚い男子だったら？などと妄想しつつ。

齋藤ちさと（アーティスト）

ながく眠っているしかなかった当ビルの一室に若いアーティストがやって来て、見知らぬ世界を作りあげていった数日間。
そのなかに腰をおろすのも、訪れる人たちを眺めるのも心地よく、この建物の鼓動を再び感じたようで素直にうれしく思いました。
町野三佐紀さんと渡辺望さん、ありがとうございました。
お二人のさらなるご活躍を心よりお祈りします。

鹿毛英子（CRANE Bldg. オーナー）

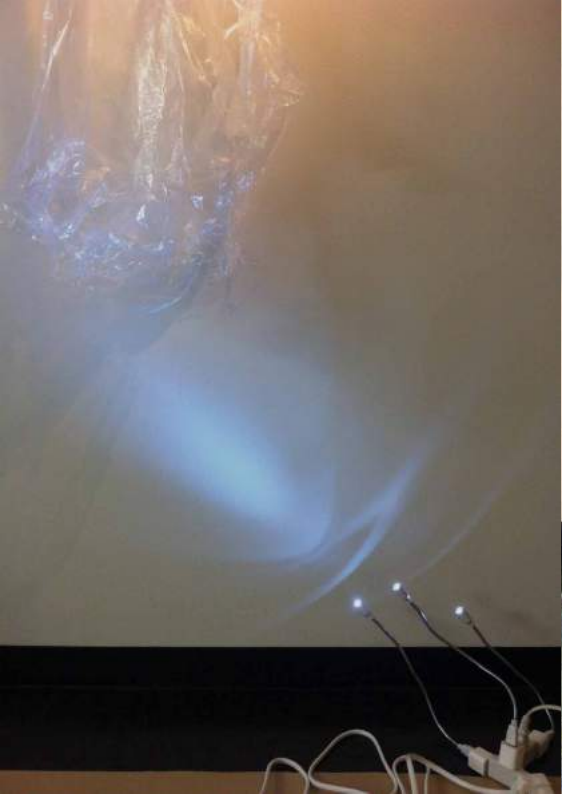


点検工 927

森川雅美（詩人）

ぼくたちははじまりの白に点が明滅する階段
をのぼる零の発見からの発光が崩れては組み
たてられるあいだに波動のちがう時間が垣間
見えだれかの手のあとが残るづれは闇のなか
のかすかの鼓動だとひらかれた天井にしさ
れ輪郭の内に見いだすかたちに沿いバラバラ
だつていい息の浮上するだれも登れないはし
この影となりよりたかく飛翔するただひとつ
燈る点に輝きぎりぎりの輪郭をたまちながら
追われるゆがみの彼方にカーブする奥行きへ

2014-09-22 — 2014-09-24



2014-09-25

「点検工」を見て2ヶ月経った。

何を書けばいいやら、憶えている事なんて何もない。

といつつも、書いてるうちにけっこう憶えているもんだ。

一番は屋上の作品、何しろ抜群に良かったのだ。半端なプロジェクト・マッピングの様でもあり、よくあるサイトスペシフィックな何かだった筈なのだが、信じられない事にとても良かったのだ。残暑の季節、肉体労働を終えた俺は、疲れきった身体で会場を訪れた。彼女達は挨拶も説明もほどほどに、勝手に見ればと言わんばかりに「点検」を口実にそれぞれの制作に没頭しているではないか。まっさらな事務所（テナント）に養生を敷き詰め、各々の嗅覚で「点検口」を発見し、こじ開け、付け足し、音や光をサンプリングし、陰影をトレースしては、嬉々として「点検」という労働に奉仕している。半ば呆れながらも、その手つきを眺めていると、何を根拠に「点検（判断）」しているの？という疑問が浮かんで来るが、そのまま自分に突き刺さる。

ドーナツをくれた。

すっかり機嫌を直した俺は、見落としたアンテナの作品を見るのに再び屋上へ。

やはり良かった。あれはまほろしか・・・。

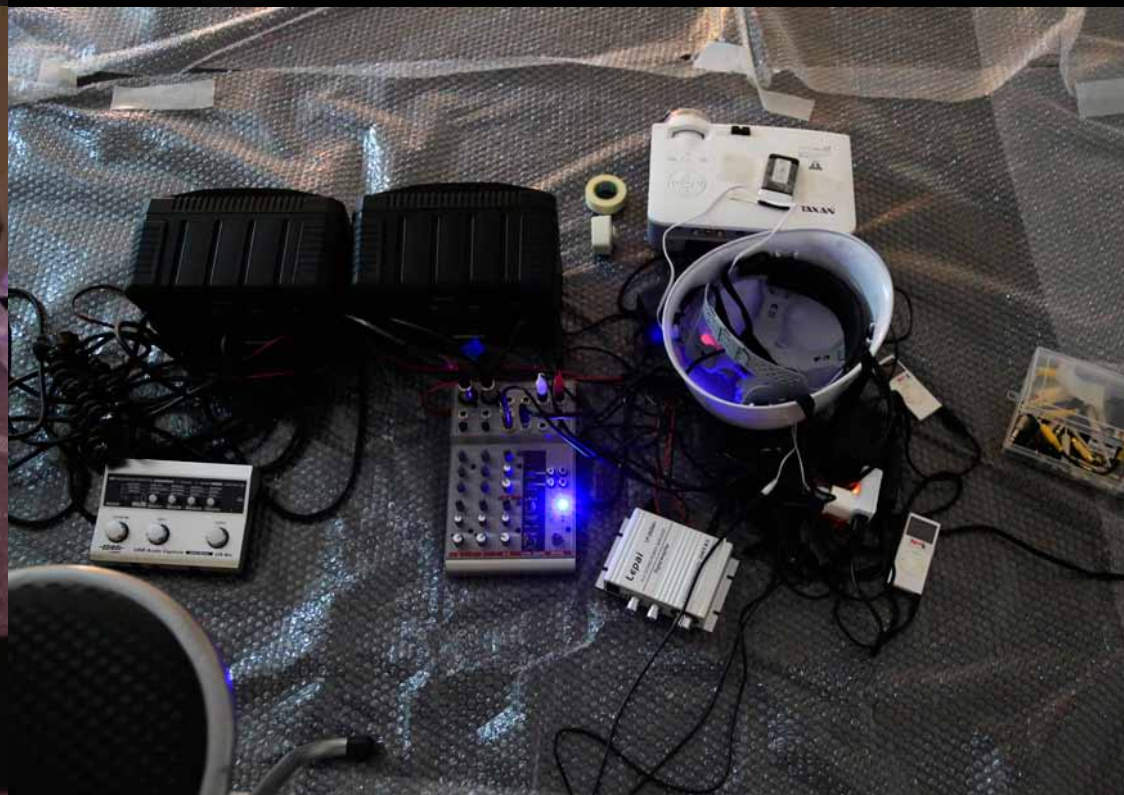
会場を後に、駅へ向かう登り坂を振り返ってみると、ビルの屋上には一番星。

あれはけっこう憶えている。

大槻英世（アーティスト）







2014-09-26

私が会場を訪れたのは絶えず人が行き来するトークショーの直前。そこに同席するどんな物も誰の所作も少しずつ、痛くもないが気になる程度、星の瞬きのようにチクチクと肌に触れて来てなるほど、作品は見えないくらいでちょうど良い。(2014.10.12)

水谷一 (アーティスト)

ドローイングの魅力というのがある。素材との対話。生み出される線。アイデアが手に直結して形を産み、いま眼前で何かが立ち上がっていく。点検工の現場には、そんな進行形のドローイング感というべきものが横溢していた。パンチカードやヘルメットの工員姿はこれから起きようとする事態の表象であり、工事現場の素材も、まだ何もものにもなっていないが故に期待を携えて、その質感が観る者を魅了する。ワーク・イン・プロGRESSにみる、新しい萌えの予感。

野口玲一 (三菱一号館美術館学芸グループ長)

「ヤドカリトーキョー 13 回目。

本格的なサイトスペシフィック・二人展 (?)

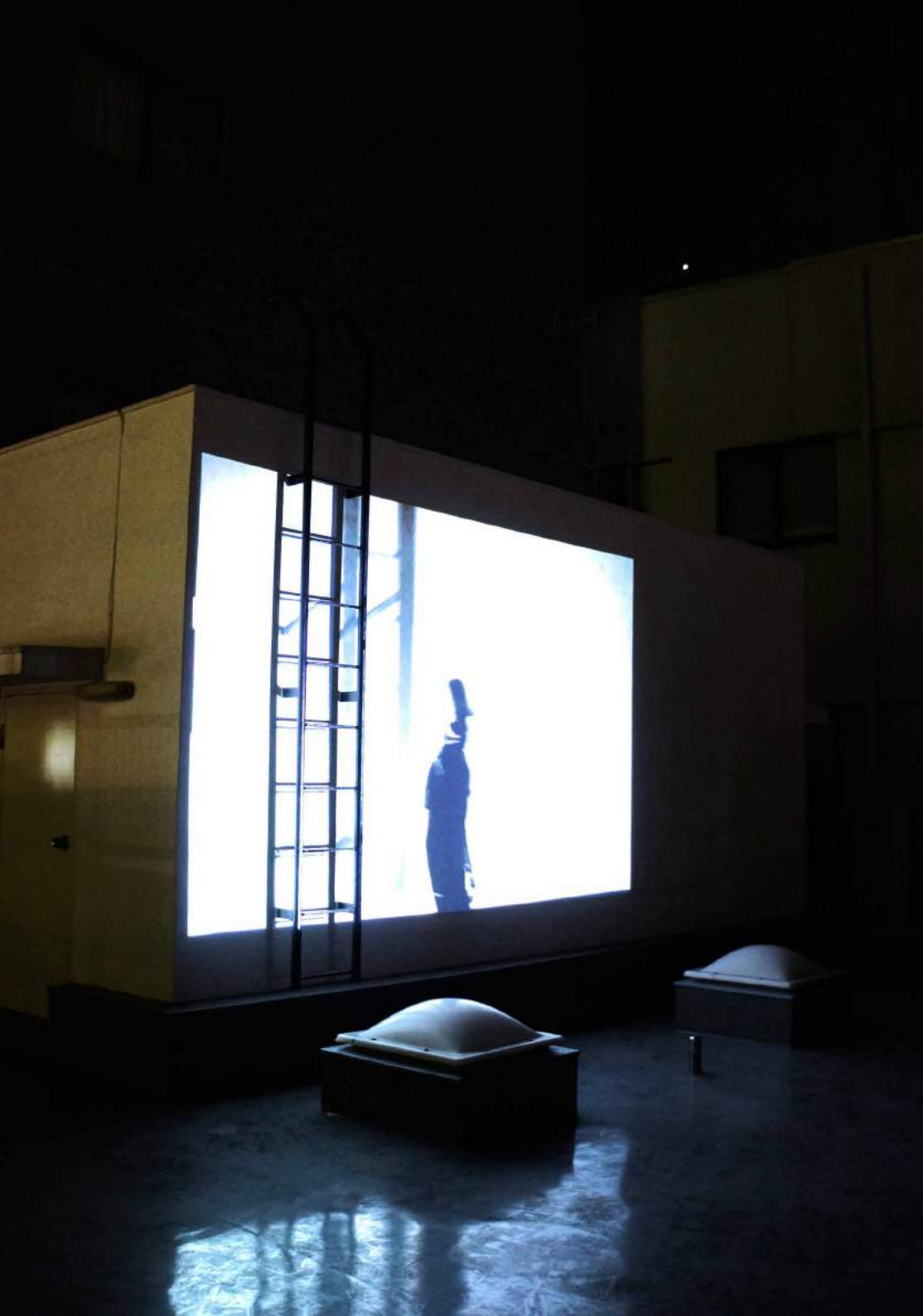
入口で、タイムレコーダを打ち入場。

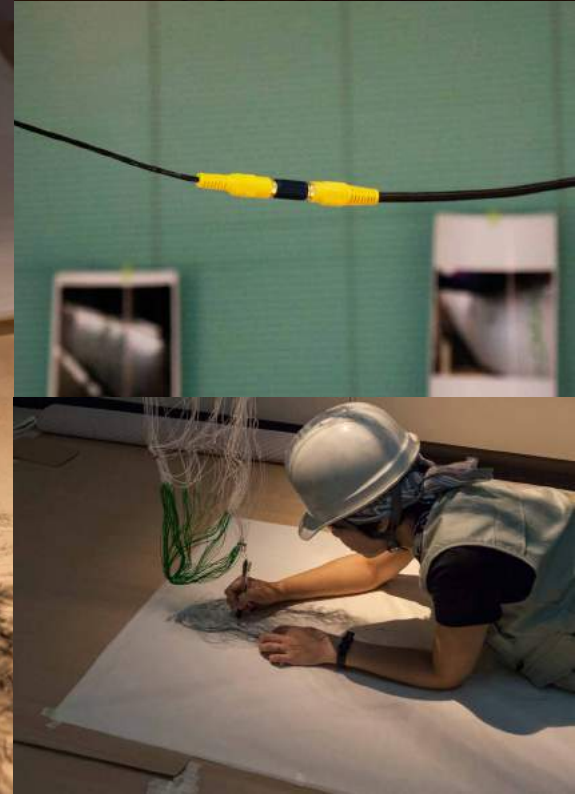
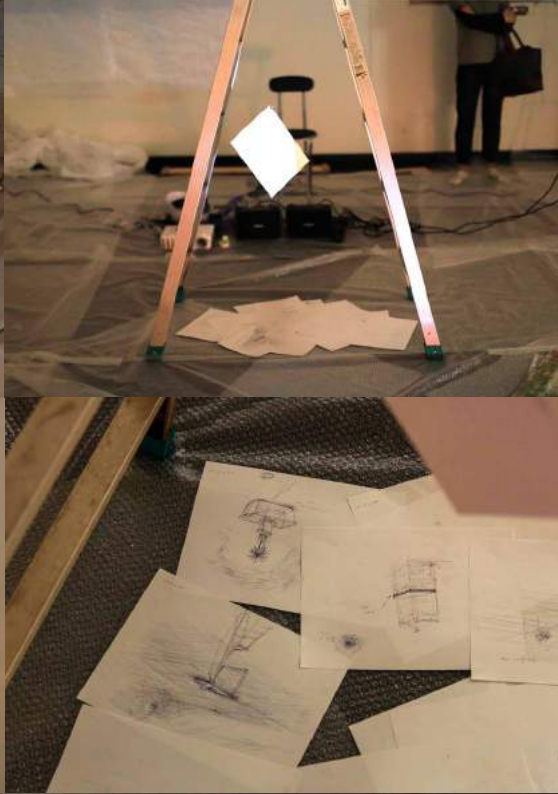
入場後、視覚、聴覚、触覚をフルに働かせないと只の作業現場。

点検工に成りすました作家から、ことの次第を聞き何を見ていたのかに気付かされる。機材、備品類を散らし接続した苦勞の末の臨場感を体験する。退場時に、再度タイムカードに打刻。1 時間以上楽しんだことに気付く。別の興味→不動産取引は成立するか？」

村田達彦・弘子 (遊工房アートスペース、ディレクター)







2014-09-27

ヤドカリトーキョーでの展示については、場所の特殊性と共に、一度参加した者としては、会期の短さにも言及せざるを得ない。場所性に反応した作品を制作するも、数日で撤去。端的に展示期間がもっと長ければという思いを抱く。

制作過程自体を見せた「点検工 / inspector」は、それまで潜在的には要請されていた長期の会期を求めない展示内容であった。空き物件で、かつ数日の会期というヤドカリ縛りに、初めて応えてみせたヘルメット部隊であった。

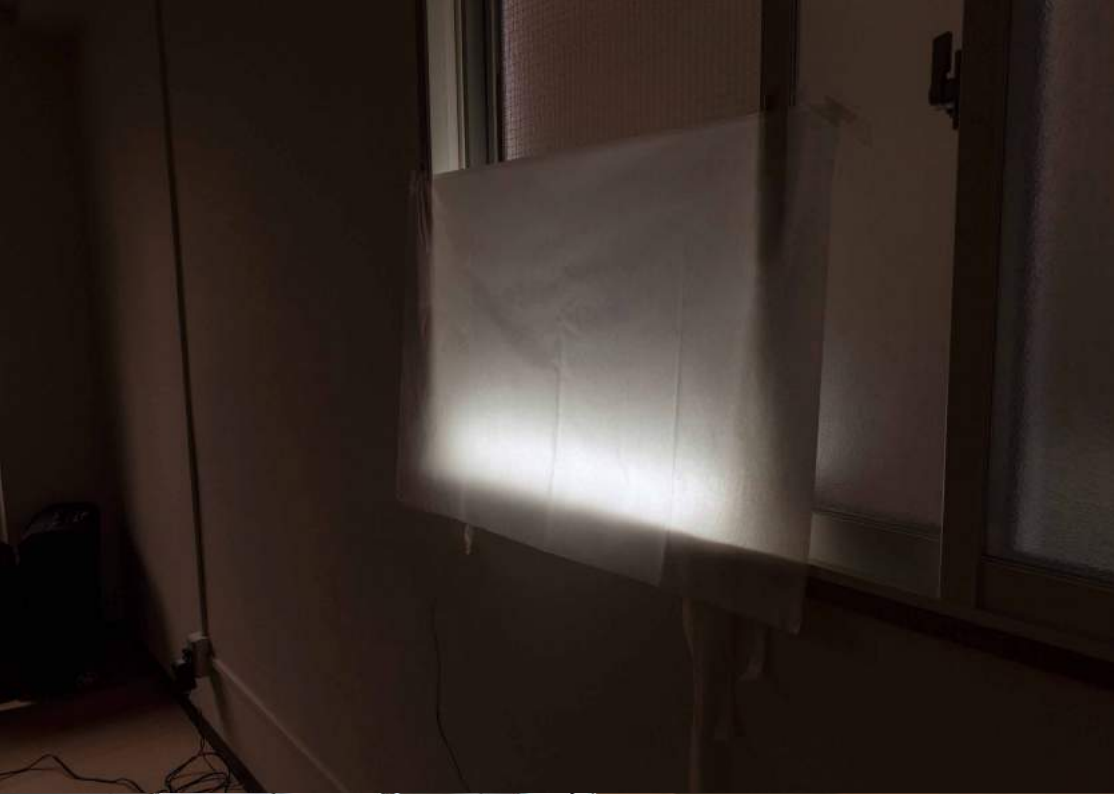
荻野僚介（画家）

ヤドカリは面白い、不動産業者と共に街中の空き物件を利用して展覧会を作っているが、しばしば見えにくい街の中の現実を垣間見ると云うちょっとだけ日常とずれた、けれども意外と新鮮な体験ができる。雑居ビルの佇まい、違法シェアハウス跡のビル、川沿いの夜景に包まれる部屋、等々だ。スタッフの不動産業の山田さんもけっこう街の諸事情に通じていて面白いことを知っている、僕らが住んでいる場所は、そう、結構面白いのだ。

さらに、今回は「点検工」だと、そう云えば、なにやら道路のマンホールの蓋を開けて出入りするなり、ビルの脇の小さな扉から出てくる、壁面の梯子を下りてくるヘルメットを被った人々の姿を見かけていたことを思い起こす。地下室に潜り込む、屋上に上がって遠くを眺める、子供時代に遊んだように動き回るのだ、自分たちを作家とは言わないのか？今回は点検工だって、町野さん、渡辺さんの後を辿り、あちらこちらの穴を覗く、壁を叩いてみる、その瞬間になにやら見たこともない作品らしきものと出会った気がするのだ。この空気、この雰囲気、この周囲には何かが潜っていると、後でそう気付くのだ。

小山徳太郎（アーティスト / 東京芸術大学教授）







町野三佐紀 × 渡辺望 × 末永史尚 (ゲスト)

町野：まずはヤドカリトーキーの活動について。基本的には、募集中の中古オフィス物件で展覧会を開催しています。展示するアーティストが自分達で企画を行っています。募集中の物件の為、会期中にもお客さんが物件を見に来る状態。色々と制約のある中ですが、工夫しながら色々な企画を進めてきて今回で13回目の企画になります。

渡辺：通常の展覧会ですと、会場の中に作品が設置してあるのが一般的だと思うのですが、今回はアーティストが作品をつくり上げていく制作過程<そのもの>を公開するというを目的に展覧会を開催しています。作品が現れたり消えたりといった状態を見せることで、普段は表にできることのない作品と作家、空間との関係性を表現したいと考えました。そのため、今回の展覧会では途中経過を見せていくことにも重きを置いています。会場内に一日ごとに図面を配置し、制作過程を記録したり、Ustream や Facebook を使って随時、制作風景を公開しています。これらのアーカイブも今回の展覧会の作品という意識で行なっています。

町野：今回ゲストにお呼びした画家の末永史尚さんです。よろしくお願いします。絵画作品って、通常は絵を描くのはひとつの面だけでですけど、末永さんの絵は複数のパネルで構成されていたり、さらに組み替え可能だったりしますよね。絵の構造自体も興味深いのですが、作品設置についても、かなり試行錯誤されていますよね。今回の展示は場所に反応して制作するという企画ですので、空間に対して常に気を配ってらっしゃる末永さんとは面白い話が出るんじゃないかと思いました。あと、学生の頃、末永さんが展示のたびに作っていたマケットをよく自慢されたことが印象に残っていて (笑)。その精巧さが印象的で。その緻密さと空間への配慮がすごいなーと思っていました。今回私たちがお呼びしようかなと思ったのは、そんな理由からです。

末永：僕は色々なタイプの作品を作っているのですが、今回はその中でも展示寄りの作品をピックアップしてお見せできればな、と思います。これが、その展示寄りのほうに足を踏み外し始めるきっかけになった、茅場町のギャラリーアーキベラゴで2008年に開催した「ニューバランス展」の写真です。展示者は僕と、富井大裕さんと、

村林基さんの三人。この時、手慣れてしまった絵や彫刻の展示方法を別の視点から変える事が出来れば良いなと思い、建築家の田中裕之さんに展示を依頼しました。最初は作品の配置などを頼みますつもりだったのですが、田中さんからもうちょっと踏み込んで展示に関わりたいというお話があり、展示の前に田中さんからお題を出し、それに応える形で三人がそれぞれ制作するという事になりました。この時与えられたお題というのは、「予定されている展示空間に対して、ちょうど半分の高さで、水平の透明な面があると仮定して制作しなさい」というものでした。ちょっと禅問答みたいですが (笑)。それに対して僕は「どんな天井の高さの空間であっても成り立つような絵を作ろう」というような事を考えつつ、小さい絵を作るという返し方はそんな面白くないので、たとえ空間が広がったとしても、同じような効果を持つ作品を作ろうと考えました。その結果、タングラムペインティングという作品を作りました。これは全部、60cm×60cmの正方形になります。モチーフになっているタングラムパズルはシルエットパズルの一種で、例えば猫のシルエットの形を出題されて、組み替えてその形をつくって遊ぶものです。このパズルの形でパネルを作り、絵を描いて、展示する状況に合わせて、形を組み替えるという作品です。ただ、この時は展示を田中裕之さんにお任せしたので、いきなりこう、平面で形を組み替えるというよりもかなり立体的な扱い方をされています。僕はそれはそれで面白かったですけども。こんな感じですね。全部正方形に戻せます。持ち運びも非常に楽です (笑)

町野：これは、組んだ状態でペイントするんですか？

末永：そうそう。基本的に、組んだ状態では何かの図になるようにはなっています。

町野：さっきのドットの絵とかは、バラしてから別々に描いてのかなと思いました。

末永：いや、一応この状態でバランスをとって配置していて、最近はこちらと違う意識で描いてるんだけど、この時は組みかえたときに面白く機能するような図が入れれば良いなと思っていて。ドットの絵に関しては、四角の中に二つ点があれば、いつか動物の目として使えるかなとか、そんな事を考えて描いてました (笑)。

町野：床に設置してあるのは結構挑戦的ですよね (笑)。

末永：ああ、これね。

町野：これが、田中さんが展示されたものなんですね。

末永：そうそうそう。

町野：これは展示に関しては末永さんは全く口を出していない状態なんですね。

末永：そう。この時の展示は確かに面白かったです。例えばギャラリー空間での普通の展示は、大抵壁のど真ん中にぼんと絵があって、スポットが当たって、高さは目線位置で、っていうなんとなくの決まりがあるんだけど、この時は壁の真ん中は全部空けてあって、コーナーを使うとか、床を使うとか、ドア上の隙間を使うとか…。もう本当に期待通りというか、この機会によって自分の展示する時の幅がかなり広がったように思います。はい。で、ここからは僕が、基本的にはホワイトキューブで展示できたら嬉しいなと思いつながらも、どんどん変わった空間での展示の依頼が舞い込んでくるので、その例をいくつか紹介します。これは山口県にある秋吉台国際芸術村の音楽ホールで、設計は磯崎新さんです。基本はアーティスト・イン・レジデンスの施設ですが、音楽ホールも付いていて、結構特徴的な空間です。

実際の展示はこんな感じですよ。ここは秋吉台にあるということもあり、その近くにある秋芳洞っていう鍾乳洞の形をイメージした形になっています。ただ普段は椅子を置いて普通の音楽ホールのように使ってたので、もともとあった建築の面白さみたいなものがなかなか体験されないような状態になっていました。展示の際には、そのもともとの意図だとか、建築的な意味だとかを呼び起こすようなことをしたくて、自分の作品も展示しつつ、建築も見せるような、そういう展示にしたつもりです。ここがメインホールなんですけど、ここに入るときはパーテーションを作ってルートを作りました。奥から入って、狭い通路を通って入って来て、広がる空間に遠回りして入ってくるような構成にしています。面白いのは、普通の音楽ホールはステージと観客というヒエラルキーがあって、観る／観られるという関係がはっきりしてるんだけど、ここにおいては、それは対等なものとして扱われていて、あえてステージを作らず、やろうと

思えば観客席とされてる所でも演奏はでき、その関係を逆転することができることですね。ここでパーテーションにしたり、展示する仮設壁みたいにしてるものは、演劇用の台です。裏手の倉庫の中に大量にあったんで、こりゃいいやと思って (笑)全部引っ張りだしてきて、使ってみました。あとここでやった事では、キャプションに色を付けるということもやりました。作品自体はあちこち隠れているので、それが見つけにくい事を逆手にとって、キャプションの方を目立つ色で作って、白い空間の中で原色っぽいのが見つかったなと思って近づいて行くと、その脇に作品がふっと見つかる…というような、キャプションと作品の関係を逆転させるようなこともやっています。

で、これが所沢にある、今は使ってない給食センターを会場にした「引込線」という、もともとは「所沢ピエンナーレ」という名前でやっていた展覧会の展示風景です。僕が展示したのは二階にあった休憩室です。もともとは畳があって、ごろんとできるような部屋だったと思うんですけど、畳は全部取ってあって、板張りのこんな空間になっています。ここでは休憩室だからタングラムを休憩してるっぽい人の形にするとか (笑)、食べ物だろうってことでカップラーメンを作るなり、チョコレートを作るなり…。

町野：給食センターだから食べ物なんですね。

末永：そうそう。で、この真ん中に乗ってる作品は、会場のマケットを作って、そのマケットと同じ体積でパネルを作り、その内側を描き写してペイントするっていう、マケットをモチーフにした作品ですね。…それでこれが、富井大裕さんが中心になってやっている「壁ざわ」の企画で、日本大学の芸術学部の彫刻科の廊下で、廊下の掲示板を使って展示をするっていうグループ展の様子です。左手に見えるポスターのように見えるのが僕の作品です。これは美術館とかギャラリーに行くと、よくその美術館の展覧会のポスターだったり、DM だったり貼ってあるんですけど、貼ってある様子とか貼り方の個性みたいなものが見えてくるのが結構面白くて。その留め方の部分だけを撮った写真っていうのを個人的に楽しんで撮ってたんですね。それをポスターサイズに出力して、掲示板に貼付けるという作品です。ただこれ、なかなか普段ここにいる学生でも作品だと気付かれなかったです。今、愛知県美術館のポスターコーナーにこれをそのまま展示してるんですけど、そこでもやっぱり気付かれないうですね (笑)。

町野：実際のポスターの貼ってある掲示板の所に貼ってあるんですね。

末永：そうそう。ようやく落ち着くべきところに落ち着いたな、っていう感じです。

そしてこれは群馬県立近代美術館の40周年の企画で、開館した1974年にフォーカスをあてた展示を1期2期と分けて開催していて。その1期、1974年に生まれた作家を6人集めるっていう企画に参加させて頂いた時の会場風景です。ここではですね、普通に展示もしてるんですけど、群馬県立近代美術館に絡めた作品を作って欲しいという依頼もあったので、群馬県立近代美術館の各展示室のマーケットの作品を作っています。ここは何度が改装してるんですけど、改装して無くなってる展示室も含めて、全展示室のマーケットを作って、各展示室に忍ばせるということをやりました。そういう形で場所の問題について回答を出しています。こうやって常設展示をやってる中にぼつんと作品を忍ばせたり…。ここではベンチの下にこそっと置いたり、ここでは普通に部屋の隅に置いたり。改装した所には改装前と改装後と両方を設置しています。ここはさっきの展示室なんですけど、高いパーテーションの上にもぼつんと置いてみたりして。あとここはタングラムを窓越しに設置してみたり。スロープ沿いに斜めの窓があるっていうのはこの展示室の特徴的な所だったんで、なんとか生かしたいなと思って、こういう使い方をしてみたりしています。

で、これが愛知県美術館で今やっている展覧会の会場写真です。タングラムの作品を使った展示みたいなアクロパティックな事はしてなくて、こんな感じで普通に絵が飾ってあるような展示方法ですね。ここで展示した作品というのは、美術館にあるものをモチーフに制作しています。この壁に飾ってある絵は、愛知県美術館で収蔵している絵を額も含めたサイズで測ってパネルを作り、額の部分を描いて、中は塗りつぶしているっていう作品です。この展示室は、ちょうど、常設展示の真ん中というか、途中にぼつんと入ってるんですよ。それで常設展示と分けられてる感じがしないので、その流れ自体を組み込んで展示に反映させたかったわけですよ。脇にあるのがキャプションの作品。パネルを美術館でつかっているキャプションと同じサイズで作って。普段常設で使っている展示方法と全く同じ高さ、絵との距離で設置してます。

渡辺：作品の色は、本来の絵画のものと同じなんじゃないか。その、どういうふうに色をチョイスしてるのかなと思って。

末永：基本は、合わせてます。えっと、そう思って、並べた写真とかを持ってきたんだけど。これが僕の絵で、これがもとの絵です（笑）

渡辺：なるほど。合わせているんですね。

末永：あとベタに変換しても違和感がないような絵を選んではいます。これが額の仕様書っていうものですね。採寸すれば良いんですけど、そもそも額を発注したときのデータが残っていればそれを使えるのに超した事はないので、あるんだったらこういうのを送ってもらって、データを一個一個拾って、絵に起こしています。で、一個良い写真があったんだけどあれ持って来なかったかな。並べてもらったんですよ、ピカソの絵の額を描いたんだけど…あったあった。

町野：おー。

末永：常設展示に出す時に、位置決めのかきのマスクングを残したまんま、僕の絵をちょっと脇に置かしてもらって。だいたい、思ったよりも色の印象は変わってなかったかなっていう認識なんだけど。はい。こんなような形で、最近展示する場所をどう読み込んで展示に反映させるかみたいな事を考えてて、こんなことをやっています。

渡辺：末永さん、ありがとうございます。ここからは私たちが普段どういった作品を制作しているのかを紹介していきたいと思います。

町野：町野三佐紀です。映像や音響を使ったインスタレーションを主にやっています。これは去年、東京造形大学の美術館で展示をしたときの作品です。映像は、展示場所に合わせてプロジェクターで壁に投影しています。今この会場の天井に映っている映像もそうなのですが、編集の段階で色々加工をしています。線や光の強弱を強調したり、動きの方でも、揺れたり点滅したり等の変化を付けることで、色々な質感の光が、映像の映ってない壁や天井などにも反射して空間全体が光るんですね。画面が点滅したら部屋も点滅する。鑑賞者はその空間に入っていく、色々な質感の光を浴びる。そういう、空間の中

へ入っていくような、体感させるような作品を作っています。

末永：これっていつぐらいからやってるの？

町野：2年くらい前ですね。これをやり始めたきっかけが、ヤドカリ第一回目の企画の時なんです。展示の話が来た時に開催まで1ヶ月を切っていて（笑）。普通の事務所物件なので、平面作品は壁設置が難しく展示しにくい。でも映像だったら、明かりをつけちゃえば普通の物件の案内ができるんじゃない？ということで、展示する事に。映像作品自体をやり始めた頃は、普通にモニターに映したり、布に映したりもしてたんですけど。これ、博士の最後の時の展示なんですけど、カーテン状にした布に映像を映しています。これは、さっき言ったヤドカリ一回目の時のです。2012年だから、2年前ですよ。脚立の上にプロジェクターがあって、手前にもう2台あります。この時は、こういう風に展示した最初の時だったので、この画面の枠の四角の形が出ているのが、今観るととても気になっちゃうんですけど…、こういった、空間を包みこむような展示の仕方はこの時が最初です。映像の素材には波とか、水面の映像を使う事が多いんですけど、水面というのは光の反射なので、表情はすごく幅が広い。もったりした感じだとか、ギラギラした感じだとか、光の種類が多様で。そういった素材を壁や天井へ投影すると、部屋の中全体へ反射した時にすごく良い効果があって。映像の速度は大抵スローにしています。動きにも質感というものがあると思っているので、それも同時に見て欲しいので。撮影されたままの速度だと、ちゃんと観れないという気がしています。視線が追いつけないっていうか。表情のディテールを観ようとした時に、時間が速いとそこまで追えない。ちゃんと観る前にすぐ流れてっちゃうから。だからそのディテールを見せたい為に、スローモーションを多用してます。あと、色は基本、モノクロにして、質感が際立つようにしてます。…ここは美術館だったので、ストレートに投影して、シンプルにできたんですけど。なんか私も、変な場所で展示をやってくれとか言われる事があって（笑）。去年の「Unknown」というグループ展でも、ポイラー室だったところを使って展示したりしました。

で、これは gallery coexist という木場にあるギャラリーでの個展の時のです。ここは結構引きがとれて広いので、機材も床に置いたままで展示しました。こんな感じで、

映像素材はかなり加工します。上から床に投影する作品もあります。映像以外に、ドローイングも描いています。やっぱり細かい流れを見たいんですね。これも、動いて移り変わっている状態を描いているんだなーって思います。延々と描き続けて延々と動き続けているっていう意識があるので、こういう巻物状の作品を作った事もあります。これは写真の作品です。映画が好きで色々見るんですけど、映画も動いているのもですよ。動いている映像が好きみたいで。人のしぐさとかの一定の動きの合間に、時間の狭間みたいなものを感じることもあるんですけど、なんかそういうのが表現出来ないかなと思って、やっています。これ、どうやって撮っているかというのと、大きいモニターに映画を映して、スロー再生にしたり、あるシーンを一時停止したりして、シャッター速度を遅くして、カメラの方を揺らして撮っています。何枚も撮影しながら、位置を工夫して絵作りしています。光を使って描いている感じですね。こうやって顔が糸を引いている感じとか。あとは最近、音を使いたいなと思うところがあって。これは少し前に末永さんも一緒に出品していた展示で、リトグラフで作品を作るっていう、TIME&STYLEでの展示です。版画で、ドローイングかあと思うと、さっきの線のドローイングで版画にすると、絵になっちゃうので、絵をそのまま版画にするのは、あんまりピンとこなかったんで、これ海の音の波形なんですけど、これもドローイングかなっていうことで。海の音の波形の画像を少し加工したら、波が跳ねてるような感じになって、なんか面白くて、こういう事やりました。普段はこういう作品を作ってます。

渡辺：渡辺望です。私も町野さんと同じようにインスタレーションを主体に、音や映像、ドローイング、あるいは物をつくったりしながら作品を発表しています。この作品は先程町野さんのお話にもでてきた coexist-tokyo という木場にあるギャラリーで、鑑賞者との関わりをテーマにした展覧会で発表した作品です。椅子の上に置いてある本の作品は「book of the stars」というタイトルで、もとなる英文の本があるのですが、その本文中のアルファベットの「i」の「・」のみを抜き出して全体の色調を反転したのになります。本をめくるとページごとに異なるドットのパターンが現れて、夜空に点在する星のようなイメージを鑑賞者に与えます。この作品では本に含まれる空間性や言葉の奥行きを表現したいと思い制作しました。

それからこの作品は、コードカラー美術館プロジェクトという美術家の松本春崇さんが企画されたプロジェクトで発表した作品になります。本来、美術館の機能を持たない場所にその機能を持ち込むといった主旨のプロジェクトで、与えられた場所がなんと一般家庭のお庭だったんです。そのお庭の家主のおじいちゃんがいつも庭仕事をしていて、本当にとても綺麗なお庭で、時期もちょうど植物がたくさんある季節で…そういった環境から家主の想いや植物と寄り添いながら作品をつくりたいと考えました。そしてリサーチを重ねる中である学会誌の記事が目にとまったんです。そこには「植物は根っこで会話をしている」といったことが書かれていて、実際には根からラップ音を発して危険がせまっていることを互いに伝えるといったことなんだそうですが、その記事を目にしたことをきっかけに、植物の会話に耳を傾ける、そういった行為自体を作品にできないかなと。そこで集音機を実際に土の中に埋めて、ヘッドフォンをつないで、鑑賞者が地面の中の音をリアルタイムで聞くことができる作品をつくりました。また、会期中Ustream配信を行なって会場に行かなくても作品が鑑賞できるシステムをつくりました。1ヶ月の会期中、人々の反応から気づいたことは、「植物の声を聞く」というコンセプトであったにも関わらず、実際に耳にする音は土というフィルターを通して聞こえる人々の生活音であったこと。そして、それはまさに植物が日々聞いているであろう「人々の声」だったんです。つまり、意図が反転してしまったんですね。でもそれに気づいたときに、人間社会と植物の世界が密接につながっていること、相互に関わっていることが感じられて、とても面白く思いました。後に高知でも同様のプロジェクトを行なっていて、今後も様々な土地で実施したいと考えています。

この作品は「TRACE」という作品で、12枚の楽譜と12曲の音からなる作品です。発表したギャラリーは、以前は配線用のコードを収納する倉庫だったそうで、その重さで床がゆがみ、傷もたくさんありました。それを見たときに自分が描くドローイングに似ていることに気づいて、それを使って何か作品をつくりたいと思ったのがきっかけになっています。図形楽譜というジョン・ケージやオノヨーコなどが用いていた抽象的で即興的な音楽を書き記すための楽譜があるのですが、今も現代音楽の現場では多く使われているそうで、絵のような楽譜なんですよね。幸運にも、それを使って作曲、演奏する笹久保伸さんというギタリストさんが知人にいまして、その

方に依頼して、床の傷や汚れのパターンを撮影した12枚の画像を一冊の楽譜にまとめたものをお渡しして、一枚一曲という形で12曲の曲を作曲、演奏していただきました。実際の展示では鑑賞者が楽譜をめくりながら個々の曲を鑑賞できるように、楽譜と一緒にCDプレーヤーを置いて展示をしました。

そしてこれは「Map」という作品です。先程の末永さんのマケット作品にも何か通じるところがあるように自分では思っているのですが、この作品は展覧会会場のマップ、会場図をもとにしてつくったものです。この作品を発表したギャラリーはそれまでに16の企画展が行なわれていて、その会場図のアーカイブをお借りして、作品が置いてある位置にドットを打って星図のようなものを作成しました。星図というのは一枚の紙の上に異なる時間や空間が存在していて、遥か彼方にある存在を私たちの手の内に引き寄せるものだと考えています。展覧会会場も目の前にある作品だけではなく、過去に様々な作品が存在していて…、そういった今は目に見えない作品を手の内に引き寄せて、鑑賞者が過去の作品を巡って行くようなイメージで作品をつくりました。

このように、展示するスペースによって、その都度自分が反応したものを作品にしていくことが多いです。空間にもともとあるものを掬い上げていくようなイメージをいつも持っています。作品の紹介は以上となります。ありがとうございます。

町野：長くなってしまいましたが今回の展示について少し。

渡辺：今、私たちがお見せした作品のように、普段は今回の展示とは異なったスタンス、作品を制作しているのですが、こういったスペースと機会を与えられ、普段できないことをお互いにやってみたいね、という話を最初にしました。

町野：普段、映像やインスタレーション、音の作品などをやっている中で、やっぱり現場の状況や環境にうまく反応して臨機応変に対応する事が非常に大事なことだと感じています。今度ヤドカリで何しようか、という話になった時、すでに仕上がっている作品をこの空間にぽんと置くだけというのは面白くないよねという話をしてました。せっかくギャラリーではないこういった場所なの

で、その特性を生かし、プランがゼロのところからやってみようという話になりました。養生を敷くことからはじめ、本当にゼロでしたよね。で、最初雑然としていて、最終日の今日も雑然とはしているのですが、お互いに少しずつ何かを置いてみたり、一度置いたものを違うものに替えてみたり、消したり、片付けたり、さらに色々を出して広げてみたり…ということの繰り返しでした。2人でやっていたので、お互いの行動に反応するというところもちょっとあったかな。そういうのもなかなか面白くて、この場所でひとつひとつ点検を行なうように要素を拾っていきました。何か完成した作品という形ではないと思いますが、今回得られた事でこれを次の段階に進めて、何かしらになることもあるかもしれませんよね。

末永：僕いっぺん、展示に本格的にはじまる前に下見をしてみたくて、中に入れてもらったのですが、何かその時から印象が変わっているようで変わっていない。最終的な印象はなんかスタジオみたいだなんていう印象ですね。

町野：それはやっている時からけっこう…。

渡辺：そうそう、まさに。お互いスタジオを持っていないので、学生時代の時みたいだねという話もしていて(笑)。10日前から現場入りして毎日終電で帰る、みたいなことをやっていましたね。

末永：ちなみに二人それぞれに聞きたいのですが、この場所でやってみて、これは一番うまくいったぞというポイントを教えてもらえるとよいかと思います。なんかまだどこからどこまでが町野作品だ、渡辺作品だというものわかってない人もいると思うので、その辺を改めて聞けたらなと思って。

町野：そうですね。私の今回の一押しは、屋上のプロジェクトの作品ですかね。暗くなるで見頃なので、トークが終わったらぜひ観て頂きたいのですが…あっこれですね。屋上に上がると梯子があつてさらに上に上がれて、そこにアンテナがあります。アンテナのところに渡辺さんの作品があります。何日目だったか忘れましたが、屋上で何かやりたいと思って、夜だと暗いから照明が必要だと思い投光器を上を持って行って点けてみたら、壁に映った梯子の影が、投光器の位置をずらすとのびたり動いたりするのが面白くて。すごくシンプルで本当これだ

けのことなんですけど、これだけでも面白いというのがあって。それで正面からカメラ置いて、投光器を持った自分が動くことで出てくる影で遊んだという感じの作品になりました。梯子の線が重なったりずれたりするっていう、それを楽しんでる、確かめている、まさに点検。最後自分が登っている姿も入れているのですが、同じ場所で撮った映像が同じ場所に映るので変な見え方をします。これかなり即興的だったのですが、昨日暗くってから映したら、あーこれいいじゃんって。今回こういうことやれたかったのかなって、と少し満足したというか。

末永：これいいですよ。まだみてないけど。

町野：みてください。

末永：明るい時間に来てしまったので。

町野：時間かけて詰めて作る場合はこういう作品はでてこない気がします。思いつきでぱっと即興でやるっていう。まあこれはこれで発展させようと思えば発展させれるのかな、わからないけど。でもこれをやる前に、この会場の天井に映している作品を作っているんです。エアコンと蛍光灯のある天井を真下から撮影して、その映像を同じ天井に映している作品です。屋上の作品はその後に作っているの、一応段階があるんですよ。天井の作品は、ただ同じ場所が映っているだけだと面白くないので、地震を起こそうみたいな感じのイメージ。揺れたりぶれたり点滅したり、そこで何かが起こってる感じにしたかった。あとはこの会場内に何枚か壁に貼ってある写真も私の作品なんですけど、今回ここに通っていて終電で帰る途中、乗り換えの大手町の地下鉄の通路で、壁に養生がベタベタ貼ってあったり、水漏れしているところにビニールとか養生でばさばさ何か貼ってあって、すごい面白くなって思って撮影した写真です。そういうものに気付ける視線になったのは、ここで制作を始めて養生貼ったりしていて、点検する姿勢になっていたからだと思っています。

末永：屋上、下見のときに一緒に登りましたよね。そこで二人が作品をどう置くかという話をしているのを聞いていたのですが、でも屋上って、屋上だけでそうとういいじゃないですか。

町野：見晴らし良いですからね。気持ちいいし。

末永：風も抜けるからね。屋上の体験に作品で勝つのは結構大変だになっていうことを思いながら聞いてたんだけど、でもなんか結果的にすごくいい解答になったんじゃないかなと思ってます。

町野：よかったです。屋上、皆さん行かれたら、上の方に、渡辺さんの作品が…星が、あります。あとヘルメットが手すりに引っ掛かっていますが、そこから音が聴こえます。その音源は渡辺さんがここの現場で録音した音をミックスさせて屋上にあげているというか流しています。

渡辺：その星の作品について少し。展示前に3人で屋上で話した時、空の話をしたのですが、覚えていらっしゃるかな。「(都内の) 空って明るいよね」っていう何気ない会話だったのですが、それがなんとなく頭にあって、翌日作品として設置したのが、そこにある脚立を登って天井裏を覗く作品になります。天井裏の暗闇の中に照明が一点仕込んであるのですが、実はあれは星のつもりなんです(笑)。この会場は皆さんもご存知のとおり、夜でも街の灯りで空が明るい都内に位置していて、その会話をきっかけに、実は都内の夜空の闇よりも、この天井裏の空間のほうがより暗さをもっているんじゃないかってことに気がついて…天井裏の空間を夜空の空間に置き換えるようなイメージでつくりました。加えて、先程町野さんの話にも出てきたように、屋上にも一点、星を設置しました。これは空間が置き変わるときに星が降ってくるようなイメージで…かなりささやかにあるので、気がついてもらえると嬉しいです。

このように普段の何気ない会話や気づきから私の作品は生まれていて、今回のこの企画ではそういった自分の性質を改めて認識する良い機会になりました。

末永：なるほど。じゃあ今のところ二人的には屋上がいいわけですね。

渡辺：あれ、2階もいいですよ(笑)。でも先程の話にもあった屋上にあるヘルメットの作品は町野・渡辺の共同の作品なので、個々の作品と合わせて、屋上の空間は今回の企画の全体像が出ているのかなと感じています。

町野：こういう機会ってやっぱり大事ななと思いました。私は家で制作しているのですが、狭いのでいろいろ広げる場所がないっていうのもありますが、家は生活空間なので。今回こうやって渡辺さんがいたというのものもあるし、

たまに末永さんが訪ねてくれたり、写真撮影してくれた土田さんも訪ねてくれたり、超短期スタジオ、超短期レジデンスという感じがしましたね。普段とは違う環境に身を置く事で何かに気付いたり、場所からインスピレーションを得たりという経験は、短い時間でも得られると思いました。即興的に掏り上げた経験っていうのは、今後、時間をかけた制作にもちゃんと返していけるんじゃないかという気はしていますね。

末永：その場所で展示をするということよりもその場所で作るということのほうが今回大きかったのかな。という気がしますね。

町野：そうかもしれませんね。

渡辺：そうですね。「その場所で作る」ということを「作品」としてみせていくということが、今回私たちが一番やりたかったことだと思います。今アーティストランってたくさんあると思うのですが、今回、作家の自主企画の可能性に挑戦したというか…冒頭でもお話したアーカイブも作品であるということも、大きな意味をもっていると感じています。

末永：なるほど。ちなみに僕の場合はやる場所がもともと強いんですよね。ヤドカリトーキョーをみると、ここでよくできるなと思うことがあって。というのも、空き物件ってそこにいたるストーリーを共有できていないじゃないですか。建築的体験として持っているかもしれないけど、日用品がそがれていて、きっかけみたいなものが取り払われていて、なおかつ僕だったら磯崎新建築ということで、磯崎さんの著作を読むとかなんかいろんなアプローチはできるんだけど、なんかそういう前もって共有できる情報みたいなものを取られた状態の中で作品を展示するとか、つくるとかっていうことのきつきを僕は感じるので、そこに挑んでいる姿はすごいなと思いつつ、みていたのですが。

渡辺：私個人としてはやっぱりとっかかりが少ない分、厳しい面が多々ありますね。ただ、その中でどれだけ自分ができるのか、可能性を探っていけるのかといった気持ちがあって、ヤドカリをやる時はいつもそれに挑んでいるような感覚があります。

町野：いや、ほんとうにヤドカリというものがきついで

す(笑)。その場所で何をするか、何を置くか。その意味みたいところで、いつも苦労します。どこかでバランスをとるわけですけどね。でも作家によって色々なアプローチがあるのが面白いところです。

末永：でもその中では今回が一番じっくりきているというか。やっぱり空き物件をそのままギャラリーにしてしまうと、そこに作品があることの違和感みたいなものがみえてしまうので、そういう問題をクリアした上で新しい作品がつくれているので、とてもいい展覧会というか、制作機会なんじゃないかなと思ってみていましたけど。

渡辺：確かに今回10日間、現場に詰めて制作していたので、そこで時間とか空間とか、お互いに共有したものがあって、その上で今、この空間をつくれているというのは、今までのヤドカリにはないことだと思います。展覧会に来てくださった方が、普通の空き物件だと人の気配は感じられないけど、今回は私たちがいたから空間に人を感じるといったことをおっしゃっていて、それって今までとは大きな違いだなと感じました。



末永史尚 Fuminao Suenaga

1974年山口県生まれ。1999年東京造形大学造形学部美術学科美術I類卒業。日常の風景や展示空間に関わるものからピックアップした視覚的トピックをもとに絵画・立体作品を制作している。主な個展に、2015年「放課後リミックス」Maki Fine Arts（東京）、2014年「APMoA Project, ARCH vol. 11 末永史尚 ミュージアムピース」愛知県美術館（愛知）、2012年「やまぐちアーティスト支援事業 末永史尚個展『かげり』」秋吉台国際芸術村（山口）。主なグループ展に、2014年「1974年に生まれて」群馬県立近代美術館（群馬）などがある。
<http://www.fumisue.sakura.ne.jp>

町野三佐紀 Misaki Machino

1977年富山県生まれ。2002年東京造形大学絵画科卒業、2009年東京芸術大学大学院 博士後期課程（美術・油画）修了。主に複数台のプロジェクターを使用し、展示空間の中で鑑賞者に自分の身体的・心理的な流れを意識させるような映像インスタレーションを行う。ダンスや音楽とのコラボレーション、音楽ライブでの映像演出等も行う。
<http://morereal.sub.jp>



渡辺 望 Nozomi Watanabe

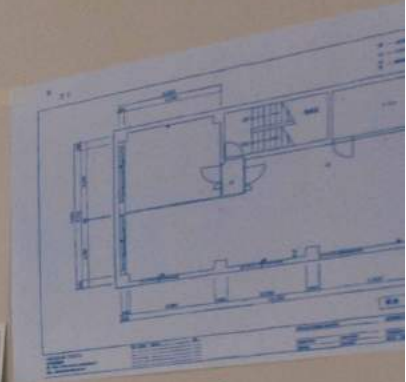
1984年神奈川県生まれ。2009年多摩美術大学大学院博士前期課程修了。2015年より渡英。本の中のことばを夜空の星々に見立てた作品や、床についた傷や汚れの痕跡を図形楽譜に見立て音源化した作品などがある。主な展覧会に、2014年「Unknown Nature」Underground（東京）、「間と間の間」NADiff a/p/a/r/t・NADiff contemporary（東京）、2013年「糸を分ける」gallery COEXSIST-TOKYO（東京）など。
<http://watanabenozomi.com>

ヤドカリトーキョー YADOKARI TOKYO

不動産とアーティストによる共同企画プロジェクト。2012年1月、日本橋にある築50年のオフィスビルの空室で展覧会を開催したことをきっかけに発足。東京都内にあるビルの空室を舞台に、国内外で活躍する様々な作家が集い、企画・発表を行なう。



10月15日
10月16日
10月17日
10月18日
10月19日
10月20日
10月21日
10月22日
10月23日
10月24日
10月25日
10月26日
10月27日
10月28日
10月29日
10月30日
10月31日



本展はアーティストの自主企画のため、カンパ募集中です。
ご協力お願いします。
下記内装の箱にお預けください。

入居マント、ならびに設備の状況にご注意がかりますので、
お断りくださりますようお願いいたします。
サドカリーキー

ドリンク持ち込みあり！
本館はアーティストによる自主企画のため、レセプションにおける
お断りくださりますようお願いいたします。
お断りくださりますようお願いいたします。

本館はアーティストによる自主企画のため、レセプションにおける
お断りくださりますようお願いいたします。
お断りくださりますようお願いいたします。

スタッフ
9/25 (木) 14:00 - 16:30
9/26 (金) 14:00 - 16:30
9/27 (土) 14:00 - 16:30



お針さく
お針さく

お針さく
お針さく

A clipboard with a checklist and a pair of white work gloves hanging from the top. The clipboard has several sheets of paper with text and diagrams.



点検票

この書類の保存期間は3年です。大切に保管して下さい。平成 26年 9月分

点検対象物	名称	CRANE BLDG.		管理者	ヤドカリ東京	
	所在地	東京都文京区湯島3-1-9 2F			yadokaritokyo@gmail.com	
	用途	事務所・店舗・住宅		代行者		
	構造・規模	RC造地上 4階地下 1階			78.26㎡	
	点検種別	機器・総合		前回点検日	年 月 日	
実施期間	2014年 9月 25日		～		2014年 9月 27日	
点検者	資格	点検者番号		資格	点検者番号	
	氏名	町野三佐紀 印		氏名	渡辺望 印	
	1977年富山県生まれ。2002年東京造形大学絵画科卒業。2009年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。鑑賞者に自身の身体的・心理的な流れを意識させるようなインスタレーションを行う。http://morereal.sub.jp		1984年神奈川県生まれ。2009年多摩美術大学大学院博士前期課程絵画専攻修了。本の中のことばを夜空の星々に見立てた作品や、植物が地中で交わす対話に耳を傾けるプロジェクトがある。http://watanabenzomi.com			
点検日時	点検結果		(計画と実施、施設、行動に対する)		確認者	
	種別・容量等の内容	判定	不良内容	措置内容		
9月25日	14時00分～16時00分					
	17時00分～19時00分					
9月26日	14時00分～16時00分					
	17時00分～19時00分					
9月27日	14時00分～16時00分					
	時 分～時 分			16:00～7 18:00～19:00		
備考	備					
	考					
	測定機器					
	機器名	形式	校正年月日	製造者名	機器名	形式

備考 ヤドカリトーキョーは、不動産とアーティストによる共同企画プロジェクト。
東京にあるビルの空室を使用し、国内外で活動中のアーティストによる作品展示を行う。 http://valueraise.jp/yadokaritokyo/



ヤドカリトーキョー vol.13

「点検工 / inspector」 町野三佐紀 渡辺望

会期 2014年9月25日～9月27日

<公開制作>

9/25 (木) 14:00～16:00 17:00～19:00

9/26 (金) 14:00～16:00 17:00～19:00

9/27 (土) 14:00～16:00

<トーク ゲスト: 末永史尚 (画家)>

9/27 (土) 16:00～17:30

<レセプション>

9/27 (土) 18:00～20:00

会場 東京都文京区湯島3-1-9 CRANE Bldg. 2F

主催 ヤドカリトーキョー

参加作家 町野三佐紀
渡辺望

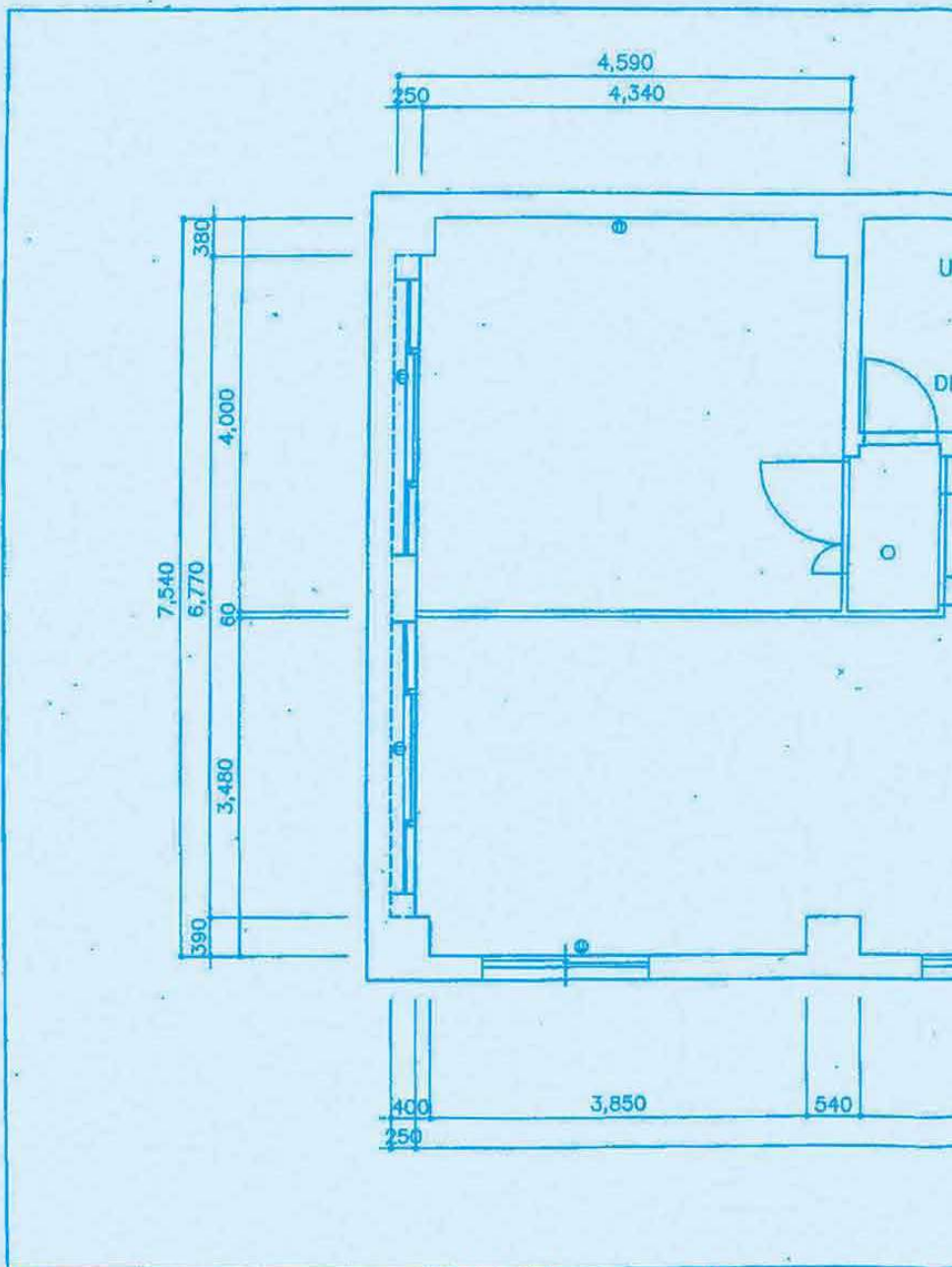
寄稿 大槻英世
荻野僚介
鹿毛英子
ジェイ・コムダ
小山穂太郎
近藤昌美
斉藤ちさと
野口玲一
水谷一
村田達彦・弘子
森川雅美

写真 土田祐介 村上郁 安田豊

企画・発行・編集 町野三佐紀 渡辺望 常田泰由

デザイン 常田泰由

発行日 2016年3月14日



YADOKAI TOKYO

ヤドカリ東京

HP <http://vbaerabe.jp/yadokaitokyo/>

MAIL yadokaitokyo@gmail.com

NO	DATE	ISSUE	BY